鈴木洋子著

『日本における外国人留学生と留学生教育』

（春風社，2011年，325頁）

黄　福涛（広島大学）

本書は，歴史的・実証的視点から日本にいる留学生と留学生教育の変化，実態と問題点などを解明しようとしたものである。

本書は基本的には4部からなっている。序で現在の留学生の受け入れの状況などを概観し，留学生受け入れの意義を簡潔に述べている。

第1部は，韓国，中国，東南アジアからの留学生の受け入れの開始の実態，そして日本の敗戦を挟み，「留学生10万人計画」までの留学生教育を歴史的に追った。具体的には，「韓国からの留学生」（第1章），「中国からの留学生」（第2章），東南アジアからの留学生（第3章），戦後の留学生受け入れ（第4章）と「留学生10万人計画」（第5章）からなっている。

第2部は，筆者の最近の調査などから，21世紀に入ってからの留学生の意識や留学生教育の実態を考察した。「21世紀の留学生」，「留学生の日本での就職」，「留学生のアルバイト」と「採用側の意識調査」という4章から構成されている。

第3部では留学生受け入れや留学生の教育の課題をみながら「留学生30万人計画」達成に向けて提言した。具体的には，第1章は，「留学生30万人計画」の背景を整理した。第2章においては，「留学生30万人計画」を支える環境を述べた。第3章では「留学生30万人計画」達成のために，どういう方策や措置をとればよいかについて論じた。第4章では「これからの留学生教育」について，英語プログラムの問題や「日本語」能力の評価などの課題を取り上げた。

第4部は，現在の先行的な留学生教育，とくに日本語教育の具体的な事例を示しながら，今後の方向性を示唆した。具体的には，第1章では留学生の日本語教育の現状を紹介した。第2章では日本語教育の最前線について，留学生向けの日本語教育を改善するために，日本語教育の方法や内容などをまとめた。

以上のような内容構成に基づく本書の主な特徴としては，以下のような5点が挙げられる。

第1に，本書は，留学生教育の歴史の流れ，現状，その未来を整理したうえ，アンケート調査の分析結果に基づいて，日本における留学生教育の現状，問題点とこれからの改善すべき点などについて，単に学術的な視点から留学生教育に関する歴史的な解説・研究を行うことにとどまらず，現場に立って様々な授業開発・改善の試みを実施している関係者，とくに筆者による経験・感想に基づいて，授業の目標から，内容，授業の展開，シラバスの作成，評価をはじめ，教授法など技術的なものまで多岐にわたって，述べている。換言すれば，歴史的考察と実証的分析を通して留学生教育の全体像及び現場での

留学生教育に関する多種多様な実践事例に取り組むことによって，日本における留学生教育の変化，役割，その改革における問題点及びこれからの対策が説明していることは，本書がもつもっとも特徴的な点ではないかと思う。本書は，留学生教育に関する授業内容や教授法などの開発・改善において，日本における各大学や教育機関において留学生教育最前線にいる関係者や教員のみに役立つのではなく，留学生教育の研究を従事している研究者や学者にも重要な参考資料になるだろう。

第2に，本書に収録されている，筆者自身の実践している留学生教育を読んでいるうちに，読者は，様々な事例研究に基づいて描かれている現場にわが身が置かれているような感覚を持つことである。たとえば，第IV部の第2章では，武蔵野大学大学院言語文化研究科の高度人材育成の日本語教育コースを事例として，日本語関連の授業内容や，ビジネス関連の授業内容，授業実践に対する感想などを取り上げているため，第一線の授業担当者の努力が直接的に体感でき，留学生教育現場の様子と筆者の心境も捉えられるような感じを読者は受けるであろう。

第3に，本書は既出の研究成果や文献資料などを用いる一方で，筆者自身が実施したアンケート調査や，留学生を採用した企業側のアンケート調査のデータを分析したことを通して，最近の留学生教育の背景，現状，問題点とこれからの改善すべき点，特に留学生政策の変動による留学生教育への影響などについて，実証的，かつ具体的に描いている。この意味では，本書は，定性的な方法論により，日本における留学生教育の歴史及びその変化を捉えるに止まらず，量的分析手法に基づいても，特定の時期において，関係者の留学してきた動機，留学修了後についての意識などについて議論している。

第4に，本書は，とくに留学生教育に関する授業開発や教育改善などに関して，基本的には若干の大学の実践事例に基づいてまとめたものであるため，日本全体の留学生教育に関する授業改善や留学生教育実践のうえで，このような特定の大学，または1学部や研究科に所属している特定のコースにおける教員の経験や教授法の開発などが，どのようにして類型化・理論化されるのかを明確にしていない。こうしたコースレベルにおける様々な授業実践や現場経験から，どのような方法で一般的な原理・理論が抽出でき，他の専門分野，また他の大学にも活用されるのかということは，留学生教育，特に授業開発やその質の向上における今後の重要な課題であろう。

最後に，本書は，留学生教育の問題点や，改善策，これからの可能性などについて，基本的には日本語教育の視点から取り上げたものである。言うまでもなく，日本語教育が留学生教育に重要であり，日本語教育の質を高めない限りでは，留学生向けの専門教育は順調に進められないことは事実である。しかし，留学生にとっては，日本語教育以外に，留学生が従事している専門教育の現状や，問題点，特に改善策などが重要であるものの，本書はそれについての議論を十分に行っていないと思われる。本来，この領域の研究は本書が設定した研究目的や考察対象を超えているかもしれないが，今後，日本人の学生と比べて，留学生が自ら専門教育科目を履修し，または専門的授業に参加した場合は，どのような課題に直面しているのか，またこうした問題点に対して，どう解決すればよいかについて，さらなる研究が期待されていると思う。

留学生教育をめぐる様々な課題は日本のみが抱えているのではなく，高等教育国際化が進んでいる国々の多くはほぼ同様な課題に直面していると考えられる。この意味において，本書が取り上げた課題は日本だけのものではなく，世界中多くの国々が関心を持っているテーマであると言ってよい。